

# 古くて新しいリズム読みで英語の音を楽しむ

佐々木 忠夫 (ささき・ただお 宮城県松山高校)

〈メッセージ〉 3月に2度目の退職を迎え、4月から非常勤講師と在任の町の教育委員をしている。教員生活で意識してきたことは楽しく英語を学ぶこと。リズム読みはそれを教えてくれる。

## はじめに

14年前、私が前任校に転勤して2年目の春だった。前年コミュニケーション英語Ⅱを担当していた3年の生徒が、廊下ですれ違いざまに、あいさつ代わりに1年前にリズム読みをした英文を暗唱したのだ。

英語の授業にとって音読はとても大切な授業だが、生徒たちから聞く中学までの音読はそれほど重視されていないように思う。コーラスリーディングが中心で、一つひとつの単語を正確に発音することに重きが置かれ、平坦な読みになっているようだ。そのため、英語が苦手な生徒は簡単な単語すら発音できない生徒がほとんどである。

私は教員になって以来、寺島メソッド「記号づけ」で授業を作ってきた。その寺島メソッドでは英文法と英音法の2つがある。

ここでは英音法を中心である「リズム読み」について報告する。

## 1. 古くて新しい「リズム読み」

寺島メソッドは30年以上も実践されてきたものである。日本人英語学習者のために作られた学習方法だ。

しかし、日本の英語音読指導を見ると、教師などの手本をなぞって音読することが中心である。英語らしい発音を習得するためということで、シャドーイングなども取り入れられてきたが、これも基本はモデルをなぞることで英語らしい発音を身につけるという点では同じだ。

英語のリズムは強勢リズムで、しかも、強勢のある音節が等間隔に繰り返される。すなわち、リズムの等時性である。一方日本語はモーラが基本で、「拍」ということもある。すなわち、おおよそ仮名1文字が1拍になる。そこから「七五調」とか「五七調」と

いうリズムが生まれる。

このように日本語と英語のリズムはまったく異なるが、その異なるリズムで音読することは、体に異物を入れるようなものであり、拒否反応を示すのは当たり前である。

そこで、英語らしい発音が日本語話者でも習得できるように作られた指導法が「リズム読み」である。

実際、「リズム読み」の最初の段階では、生徒はうまくできず、苦勞する。拒否反応がなくなると、スムーズに音読することができるようになる。

「リズム読み」は英語らしく音読できるようになるだけでなく、前述したように、暗唱もできるようになる。特別に暗唱させる必要はないのである。

## 2. 「リズム読み」の実際

実際に「リズム読み」を行う場合、リズム読み記号のついているプリントを作らなければならない。それが一番大変かもしれない。

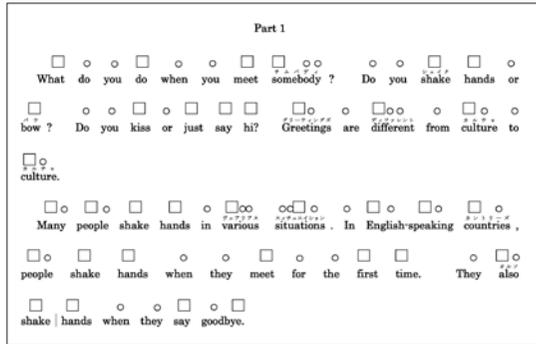
寺島メソッド基礎教材として、*There's a Hole, The Big Turnip, The House that Jack Built* がすでにあり、それを利用することができる。また、英語の歌を教材として使うこともあり、多くの歌にすでに記号がついているものもある。

自分で作るには、まずは難しい単語には、時によってはすべての単語にカタカナをつけておく(ワードのルビ機能を使うと便利である)。ただし、進学校などでは、その必要はないだろう。

また、音の脱落や連結も書き込んでおく。場合によっては授業時に説明しながら生徒に書き込みをさせるようにする。

次に、内容語(名詞・動詞・形容詞・副詞)の第一アクセントのところに□印をつける。機能語(前置詞・接続詞・代名詞・助動詞・be動詞・have動詞)には基本的に強勢はないので、小さい○印をつける。

時間がないときには□印だけでも十分である。



授業では、まず、カタカナを読む練習から始める。連続するカタカナは意外に読みづらいものである。だから、ここでしっかり練習しておく必要がある。

ここから「リズム読み」になる。生徒にペンを持たせ、全員がリズムを合わせて机をたたく。叩いた瞬間に□のついた単語を読む。

実際は、まず、私がやって見せる。私はしっかり叩く必要があるので、吹奏楽部で不要になったドラムスティックをもらって、それで叩いている。1文ずつゆっくりと見本の後に生徒が読む。それを1文につき3回程度繰り返す。難しい文は回数を増やす。

1文1文ができるようになったら、歌であれば、全体を通したり、教科書などは1段落または1パートを通してやったりする。

大体できるようになったら、4～5人ごとのグループで試験を行う。判定基準はリズムがそろっていること、叩いたときに□のついた単語が読めていることの2つだけである。何回挑戦してもよいことにしている。

歌のときは、リズム読みのテストだけでなく、歌のテストもする。音楽の試験ではないので、リズムに合わせて歌えていればよいことにしている（音程は採点基準にはしない）。

### 3. 「リズム読み」に対するさまざまな反応

このリズム読みを見て、イギリス出身のALTが学校で同じような読み方をしていたと話していた。ネイティブも同じような読みの練習をして、英語のリズムを体に染み込ませているのかもしれない。

はじめてリズム読みをした生徒たちは、最初は戸惑っているが、練習を繰り返すうちに、その効果に

気づき始めた。

まず、音読の楽しさを味わっているようだ。中学時代は読めない単語がいっぱいあり、苦痛だった音読がリズム読みをすることで楽しい活動に変わっていった。

また、中学時代に暗唱テストがあって、それが苦痛だったという生徒も、最初に紹介したように、英文を暗唱しようと思わなくても暗唱してしまうほど、自然と口から英語が出てくると言っている。

ある生徒は、アメリカの高校生をホームステイで受け入れたとき、弟が英語で話しても通じなかったが、リズム読みをしている自分の英語が通じたという体験を語っている。

文化祭のステージ発表で、映画『天使にラブソングを2』の中の“Joyful, Joyful”を発表したが、練習を生徒たちでやっていたとき、「先生、リズム読みをしないと歌えません」というので、すぐにリズム読みプリントを作った。それをもとに2・3回練習したら、すぐに歌えるようになった。

英語検定2級を2年生で取得した生徒は、2次試験のために、英語の歌のリズム読みをして、合格を勝ち取ったと言っている。この生徒はまた、テレビで大坂なおみがインタビューに答えている内容が聞き取れたと言っている。

指導主事が私のリズム読みの授業を見て、「ぜひ、県内の先生方に紹介したい」とまで言っていた。

### 4. 英語は「易行道」で

生徒の感想で一番多いのは、リズム読みの楽しさだ。学ぶことは楽しいことである。

しかし、日本の英語学習は暗記を強いる。たとえば、英単語の暗記は単語帳を全員に購入させ、小テストをして暗記を強いる。そのような苦行に耐えられる生徒はよいが、そうでない生徒にとっては苦痛以外の何物でもなく、英語嫌いになる。だから、英語学習が続かなくなり、成績が下がる。

リズム読みを通して英語音読の楽しさを味わうことで、英語学習が継続できるようにしていきたい。

〈参考文献〉寺島隆吉(2000)『英語にとって「音声」とは何か』あすなろ社